

なり、左根掘左根延小菅五味子、左百合、佐沼田などは、底の會にかよふ左にて深きにいへり、眞男鹿、眞寐、佐夜中、狹衣、佐青、狹藍々々、狹丹、頰狹丹塗、酒などは眞なり、眞は宇万の約にて物を美る詞、眞木眞賢木などの眞これ也、早苗、早蕨などは和左の約にて早きなり、香木なりといふよしは、神樂歌に、佐加幾波乃加乎加久者之美とよみ、その外にもおほかればなり、清正集に、櫛ばの香を、神葉のかをなつかしみ云々、源氏櫛に、さかきばのかをなつかしみ云々、亞槐集に、たまき未だのかながぐはしみ云々など多く見ゆ、万葉櫛の落葉に、神樂歌を引、櫛櫛のよしを云、たまき未だのつくさなり、小香木は桂櫛楠櫛などの香木にはいへど、櫛にいへる例はたえてなし、景行紀の志、遠紀の伊都加斯賀母登などの歌を、桂の加は香也、都良は圓の略にて香ありて圓なる實結木なれば香圓木といふなり、椽も圓眞子の通音なるべし、都夫良は丸きこと、いふ古語にて、履中紀、櫛の手加は小香なり、荷、荳蔻なども、香きものなれば然いふ也、多末は玉にて、實の圓なるが玉に似たればいふ、桂の都良も櫛の多万も、共に圓實のよしなり、楠は臭の木也、櫛のまも久之の約にて、酒を久之といふも久左の通音薬も須利の切しにて同義也、惡臭に久左之といひ、美香に加保利といふとのみ心得たるは頑なり、加も久左の切にて、古は別なかりしは、尿は久左則は薰屋なるを通はしいへるにても知べし、下學集に、河屋の説を説たれど、うけられず、兼輔家集、空穂國、中群要四などにみえたる、みかはやうども、御熏屋人かく、桂木屋、櫛櫛廣心樹の類を、なべて賢木といにて、御廁に奉仕する女官のことないへるなり、比、自多夫の總名、多弓八幡謠詞に、うつすや神のへる中にも、神事にはおほく櫛をや用たりけん、櫛は久須多夫、多弓八幡謠詞に、うつすや神の跡すぐに、今も道あるまつりごと、あまねしや、秀室の木の、をか玉の木の枝に、こがねの鈴を結びつけて、ちはやぶる神あそび、七日七夜の御神拜云々とあるは、太玉串のさまなり、

〔日本書紀^{神代}〕中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞板樹、而上枝懸八坂瓊之五百箇御統中枝懸八呎鏡、^{一云眞經津鏡}下枝懸青和幣、^{和幣此云}白和幣、相與致其祈禱焉、又猿女君遠祖天鈿女命、則手持茅纏之稍、立於天石窟戸之前、巧作俳優、亦以天香山之眞坂樹爲鬘、^{比羅此云}以蘿